

『賢者アキルの物語』南スラヴ圏写本の比較研究

三 谷 恵 子

1. はじめに

中世ロシア文学の代表作として知られる『イーゴリ遠征物語』(Слово о плъку Игоревѣ), これを私たちは木村彰一訳(岩波文庫, 1983 年)により日本語で鑑賞する恩恵にあずかっている。¹ その成立の経緯や作者について長く議論が続いてきたこの作品について、訳者は解説の中で次のように書いている—「写本は 1790 年のはじめごろ, 古美術の収集家として世に知られたアレクセイ・ムーシン=プーシュキン伯爵によって発見された。[...] ほかの中世ロシア文学の作品 5 点の写本とともに一冊にとじてあり, 『物語』のテキストはさいごから五番目の位置にあったという」(上掲書 196 頁)。そしてこのムーシン・プーシュキン集は, よく知られているように, 1812 年のモスクワ大火で消失した。本稿は, この『イーゴリ物語』とともにムーシン・プーシュキン文集にあって失われた「ほかの中世ロシア文学の作品 5 点」の一つ, 『賢者アキルの物語』についての論考である。以下ではこの物語の南スラヴ圏写本の系譜関係を明らかにし, ここから中世スラヴ世界の情報ネットワークのあり方の一端を探る。

2. 『賢者アキルの物語』について

キエフ・ルーシ時代には, 聖書などの宗教書のみならず, ささまざまな物語が主にビザンツ世界から直接ロシアへ, あるいは南スラヴ経由でロシアに伝えられ, ロシア中世文学の源流を形成した。そうした物語の一つとして『古代ロシア文学図書館』第 3 巻にも収録されている『賢者アキルの物語』² (以下『アキル』) は, きわめて興味深い来歴をもつ。

『アキル』は, 古代アッシリアの王センナケリブ (Sennacherib, B.C.704-681) とその宰相アヒカルの話として知られ, 紀元前 5 世紀より前に作られた古アラム語パピルス文書にその原型が記されている。³ これが中東キリスト教世界で紀元後数世紀の間に一つの物語

¹ 木村彰一訳のほかには神西清訳「イーゴリ軍記」『世界文学全集 II-27 古典篇 ロシア古典篇』河出書房, 1954 年; 森安達也訳註『イーゴリ遠征物語—悲劇のロシア英雄伝』筑摩書房, 1987 年がある。

² Творогов О.В. Повесть об Акире Премудром // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 3. СПб., 1999. [<http://lib.pushkinskijdom.ru/Default.aspx?tabid=4876>]; ボスニア・クロアチア・セルビア語圏では Priča o premudrom Akiru, Слово Акира премудрог など, ブルガリアでは Повест за Акир Премудри といったタイトルで知られる。

³ Frederick Conybeare, J. Rendel Harris and Agnes S. Lewis, *The Story of Aḫīkar, from the Syriac, Arabic,*

として成立したと考えられ、シリア、アルメニア、エジプト、グルジア、ルーマニアなどに翻訳が残されている。アラビアンナイトにも『賢者ヒカル物語』として収録する版があり、⁴ 中東イスラム圏にもこの物語が伝わっていたことが示される。また『アキル』の主人公である宰相アキルは、旧約聖書外典『トビト記』にトビトの甥として登場するアヒカルと結びつき、⁵ アッシリアのアキルの存在がユダヤ世界に伝播していたことは明らかである。

『アキル』にまつわる最大の謎は、中東一帯にこれだけ流布していながらギリシャ語テキストがないという点にあり、このために『アキル』のスラヴ圏への伝播、最初のスラヴ訳の成立の経緯といった問題が未解明なまま残されている。しかしながらイソップの伝記—日本でも天草の『伊曾保物語』として伝わる—の中には『アキル』と酷似した箇所があり、ここからは、ギリシャ—ビザンツ世界にもこの物語がなんらかの形で伝播していたことが、相当な確信をもって推測される。⁶

『アキル』は、古アラム語で書かれた原テキストの時代より、主人公アキルによる一人称で語られ、中東圏で成立した物語は次の構成をとる。

Armenian, Ethiopic, Greek and Slavonic versions (London: C. J. Clay and sons, 1898); A. E. Cowley, *Aramaic Papyri of the Fifth Century B.C.* (Oxford: Carendon Press, 1923); James Lindenberger, *The Aramaic proverbs of Ahiqar* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1983); Michael Weigl, *Die aramäischen Achikar-Sprüche aus Elephantine und die alttestamentliche Weisheitsliteratur* (Berlin: de Gruyter, 2010); 「賢者アヒカルの言葉」(杉勇訳)『筑摩世界文学大系 1 古代オリエント集』筑摩書房, 1978 年, 377-386 頁。

⁴ パートン版補遺部第 6 巻; ‘偽写本’カゾット&シャヴィ版第 2 巻; プレスラウ版など; Ulrich Marzolph, Richard van Leeuwen, and Hassan Wassouf, *The Arabian Nights Encyclopedia* (Santa Barbara, Calif: ABC-CLIO, 2004), pp. 219-220.; ロシアでも『アキル』は 19 世紀初めにはアラビアンナイトとの比較で論じられた: Полевой Н. Древний русский перевод арабской сказки // Московский телеграф, 1825. Ч. 3. № 11. С. 227-235.; Пытин А.Н. Очерки изъ старинной русской литературы. Сказка изъ Тысячи и Одной Ночи въ русскомъ переводѣ въ XIII-XIV в. // Отеч. зап. 1855. № 2. С. 109-150.

⁵ Tobit 1:22; François Nau, *Histoire et sagesse d'Ahiqar l'Assyrien (fils d'Anael, Neveu de Tobie): traduction des versions syriaques avec les principales différences des versions arabes, arménienne, grecque, neo-syriaque, slave et roumaine* (Paris: Letouzey et Ané Éditeurs, 1909), p.11.; Lindenberger, 1983; Robert J. Littman, *Tobit. The Book of Tobit in Codex Sinaiticus* (Leiden: Brill, 2008); Weigle, 2010.

⁶ イソップの伝記はマクスムス・プラヌデス (Maximus Planudes, c.1260-c.1305) によって編纂され、西欧各地に翻訳された。イソップ伝記のスラヴ語への翻訳は、中世ブルガリアのブクレシチ文集写本、ティクヴェシコ文集写本: Syrku, P. Zur mittelalterlichen Erzählungsliteratur aus dem Bulgarischen. *Archiv für slavische Philologie*, 1884, pp.78-98.; Йордан Иванов. Старобългарски разкази. Текстове, новобългарски превод и бележки. София, 1935. С. 245-249.; イソップの伝記と『アキル』の関連については Пытин. Очерки. 1855; Григорьев А. Д. Повесть об Акире Премудром // Чт. ОИДР 1913. Т. 1. С. 315-354. 日本の『伊曾保物語』については遠藤潤一『伊曾保物語第二種本の翻刻と本文研究』風間書房, 1993 年ほか。W. キャクストンによるイソップの伝記と寓話の英訳の中にも『アキル』と酷似したくだりを読むことができる: ウィリアム・キャクストン (伊藤正義訳)『イソップ寓話集』岩波ブックサービスセンター, 1995 年, 253-258 頁。ただしこのイソップは、裏切り者の養子を赦す点でアキルと異なる。

I 導入	アッシリアの宰相アキル、世俗の権力と富のすべてを得ながら実子がないことを嘆き、天からのお告げを受けて甥アナダンに養子として訓育するに至る。
II 教訓	“息子よ、アナダンよ”で始まる教訓の数々が続き、ここだけで独立した知恵文学の様相を呈する。この部分はスラヴ・リセンションに至る頃には、物語のほぼ3分の1を占めるまでに増える（ロシア版で130ほどの教訓）。
III 展開	教育を終えて後継者となったアナダンは悪性を暴露し、悪業の限りをつくす。アキルがこれを叱責、逆恨みしたアナダンはアキルの破滅をもくろむ。以後アキルの運命の変転、アッシリアの宿敵エジプト王からの威嚇、アキルの復活、エジプト王との“難題”対決と続く。アキルの勝利とアッシリアへの凱旋。
IV 懲罰	帰還したアキルのアナダンへの懲罰。多くの寓話的訓示、アナダンの死で物語は終わる。

アラム語パピルス文書の文書にすでに、アキルとアナダンのエピソードおよび“父から息子への教訓”の形をとった教訓の数々が合わせて書かれていることから、物語は原初の枠を保ったまま、ここに、一方では「親殺し」あるいは「親殺しをやめた話」の民間伝説、天と地の間に城を建てる話、砂から縄を作る難題など、ユーラシアに広く伝わる民話モチーフが織り込まれ、⁷ 他方では、ユダヤ世界やキリスト教世界で語られてきた処世術・黄金律の文言が加えられて、スラヴ世界に伝播したような形に形成されたと考えられる。

3. スラヴ圏写本

3-1. ロシア語圏『アキル』

『アキル』のスラヴ圏写本は合計 60 余あり、うちロシアに 47 ある。⁸ ロシアの研究は、Н. А. Полево́й、А. Н. Пипин、А. Д. Григори́ев、Н. Н. Ду́лнов、В. И. Пее́рцらに始まり、その主たる関心事はスラヴ語訳の底本と最初の翻訳の成立場所にあった。⁹ Григори́евは中東各リセンションとの比較をふまえてシリア由來說を主張し、

⁷ 「親殺し」「親殺しをやめた話」については *Раденкович Л. Укрытие стариков как элемент обряда перехода (на материале преданий об убийстве стариков) // Балканские чтения. 2009. С. 107-114.* など; 空中に城を作る難題のエピソードはイソップ伝記にもある; 「砂で縄を作る」(из песка веревки вьет) = 「不可能なことをなしとげる」はロシアの諺にもなっており、また西欧にも同様の諺が知られている: *Михельсон М.Н. Русская мысль и речь. Свое и чужое. Опыт русской фразеологии. СПб., 1912. С. 570.*; 『アキル』に含まれる文学的プロットについては *Гладкова О.В. Повесть об Акире Премудром // Демин А.С. (отв. ред.) История древнерусской литературы: Аналитическое пособие. М., 2008. С. 614.*

⁸ *Белоброва О.О., Творогов О.В. Переводная беллетристика 11-13 вв. // Истоки русской беллетристики. Л., 1970. С. 142-194. とくに С. 163-180.*

⁹ *Полевой Н.А. Древнерусские повести // Русский вестник. 1842. № 1. С. 54-65.; Григорьев. Повесть.*

最近では B. ルリエが、別の観点からシリア由来説を支持している。¹⁰ ドゥルノヴォはギリシャ由来説の可能性も示唆するが、¹¹ ギリシャ語テキストが存在しない以上、これを証明することは不可能である。スラヴ・アーキタイプの成立場所については、ロシアの研究者の多くはキエフ・ルーシ説を、ブルガリアなどの研究者は南スラヴ語圏の可能性を主張する。

ロシア最古とおぼしき『アキル』写本は、本論冒頭に記したように、1812年に消失したムーシン・プーシュキン集にあったとされるが、カラムジンによる短い記述以外にその存在を示す証拠はない。¹²

ロシア写本の系譜区分については、ブイピン以来の伝統により、歴史・古代学協会(ОИДР)所蔵のもっとも長い16世紀初頭頃の写本がスラヴ・アーキタイプにもっとも近い“第一世代”とされ、多少の省略と後半部分の書き換えを含む写本が“第二世代”，17世紀以後のよりフォークロア化されたものが“第三世代”とされる。¹³ 古儀式派の間では、大幅な書き換えをともなう19世紀まで伝えられた。¹⁴ ロシア版校訂テキスト最新のもの『古代ロシア文学図書館』3巻、本稿ではこれを RI として南スラヴ語圏写本との比較に用いる。¹⁵

3-2. 南スラヴ語圏写本

南スラヴ語圏『アキル』写本は10余が残されている。このうち、下記3-3.に記述するクロアチア写本の二つが、V. ヤギッチによりつとに西欧の知るところとなった。¹⁶ これ

1913.; *Дурново Н.Н.* Материалы и исследования по старинной русской литературе. I. К истории повести об Акире. М., 1915.; *Перец В.И.* К истории текста «Повести об Акире Премудром» // ИОРЯС. Т. 21. Кн. 1. СПб., 1916. С. 262-278.; *Мещерский Н.А.* Проблемы изучения славяно-русской переводной литературы XI-XV вв. // ТОДРЛ. Т. 20. М.-Л., 1964. С. 181-231.; *Тот же.* Источники и состав древней славяно-русской переводной письменности IX-XV веков. Л., 1978.

¹⁰ Basil Lourié, “The Syriac Ahiqar, Its Slavonic Version, and the Relic of the Three Youths in Babylon,” *Slověne*, 2013, No. 2, pp. 64-117.

¹¹ *Дурново.* Материалы. С. 113.

¹² *Карамзин Н.* История государства российскаго. Т. 3. 1816. С. 165.

¹³ ロシア第二世代に当たるのは *Дурново.* Материалы. С. 20-36.にあるソロヴェツキー修道院写本だがこれは現存しない; 第三世代写本については *Дурново.* Материалы. С. 89-98.; *Творогов О.В.* «Сокол трех мытей» в повести об Акире премудром // *Ларин Б.А.* Вопросы теории и истории языка. Л., 1969. С. 112.; *Пиотровская Е.К.* О III русской редакции Повести об Акире Премудром // *Вспомогательные исторические дисциплины.* 1978. Т. 10. С. 323-327.

¹⁴ *Волкова Т.Ф.* Повесть об Акире Премудром в печорской рукописной традиции // *Известия Уральского государственного университета.* Сер. 2 / Гуманитарные науки. 2011. № 2 (90). С. 113-128.

¹⁵ *Творогов.* Повесть об Акире Премудром. 1999.

¹⁶ Vatroslav Jagić, “Prilozi k historiji književnosti naroda hrvatskoga i srbskoga,” *Arhiv za povjestnicu jugoslavensku*, knj. IX (Zagreb: JAZU, 1868), pp. 65-151.

に続き E. B. バルソフがモスクワのチェルトコフ蔵書写本を“セルビア版”として刊行（本稿で Ch）,¹⁷ グリゴリーエフはさらにソフィア図書館（現ブルガリア国立キリル・メトディオス図書館）写本（現在 NBKM309, 本稿で S309）、プロヴディフ写本を上記と合わせて“セルビア版”としている。¹⁸

『アキル』写本は圧倒的にロシアに多く残されているが、それらはいずれも 16 世紀以後のものである。いっぽう南スラヴ圏写本には、すべてのスラヴ語圏写本の中で最古のもの、また次に古いものが含まれる。前者はツルナゴーラ（モンテネグロ）のサヴィナ修道院（Monastir Savina）所蔵 1380 年頃のもの（本稿で Sav29）,¹⁹ 後者はクロアチア北西部で作られたグラゴル文字文集『ペトリス集』（1468）に収録のテキスト（下記参照）である。南スラヴ圏の初期テキストは、しばしばブルガリアの研究者によって“ブルガリア版”とされ、セルビアの研究者によって“セルビア版”とされる。²⁰

バルカン半島西の南スラヴすなわちボスニアークロアチアセルビア圏のキリル文字写本のうち、セルビア内には、上記の Ch, S309 のほか、セルビア国立図書館所蔵プリビル文集写本（本稿で B828）,²¹ またセルビア国立図書館所蔵写本 Rs53（本稿で B53）²² がある。クロアチア内のキリル文字写本は、M. レシェタル（下記参照）によって刊行された。クロアチアにはさらに、17 世紀のラテン文字写本（下記参照）が一つ残されている。

3-3. クロアチア写本

『アキル』はロシアおよびバルカンの東方教会圏スラヴ世界に流布したが、これにとどまらず、バルカン北西部カトリック圏（以下「クロアチア」とする）にも伝わり、三写本が以下の文集に残されている。

『ペトリス文集』（*Petrisov zbornik* 1468）—所蔵者のヨシブ・ペトリス（Josip Petris, 1787-1868）に由来し、現在はクロアチア国立図書館所蔵（R4001）。中世クロアチアのグ

¹⁷ Барсов Е.В. Акир премудрый во вновь открытом сербском списке XVI в. // Чт. ОИДР. Кн. III. 2. 1886. С. 1-11.

¹⁸ ブルガリア写本について詳細は Irina Kuzidova, “Textologische Übersicht von südslawischen Abschriften der Geschichte über Akiris den Weisen,” *Кирило Методиевски студии*. Кн. 21. 2012, pp. 309-320.

¹⁹ Ирина Кузидова. Преписът на Повестта за Акир Премъдри в ръкопис № 29 от манастира Савина (около 1380 г.) // М. Йовчева (отг. ред.) Пъние мало Гевргию. Сборник в чест на 65-годишнината на проф. дфн Георги Попов. Сория, 2010. С. 492-509.

²⁰ たとえば Томислав Јовановић. Хрестоматија средњовековне књижевности. Т. 1. Старословенска и преводна књижевност. Београд, 2012. С. 341.

²¹ Дурново. Материали. С. 37-44.

²² Радоман Станковић. Слово Акира премудрог (препис из 1570/80. године) // *Археографски прилози*. Београд. НБС. 1980. С. 219-227.

ラゴル文字世俗文書で最大量の文集であり、アポクリファやさまざまな教育的内容の物語、また『アレクサンドロス王の物語』などが集められている。作成場所はクロアチア北西部オザリ（スロヴェニアとの国境近く）、あるいはイストラ半島のあたりとされる。²³ ここに含まれる『アキル』は、ヤギッチによって下記のキリル文字版『アキル』とともに刊行されたが、全文の完全なラテン翻字テキストは V. スティプチェヴィッチにより初めて公開された。ここでは（Badurina-Stipčević, 2015）に依拠する。²⁴ ペトリスの『アキル』は以下 P とする。

『ドゥブロヴニク・キリル文字文集』—ユーゴスラヴィア科学アカデミー（JAZU, 現 HAZU [クロアチア科学アカデミー]）所蔵のキリル文字文集で、複数の書き手による世俗的および宗教的内容のテキストを集めている。*Libro od mnozih razloga*（数々の知恵の書）1520 と題され、編纂された場所はドゥブロヴニクもしくはその付近と考えられる。本稿は（Решетар, 1926）²⁵ および HAZU 原本を参照。以下 L とする。

『デレチカイ文集』（*Derečkajev zbornik* 1622）—I. デレチカイ（Derechay János † 1634）によるラテン文字写本。デレチカイ文集は、トロイア物語、アレクサンドル王の物語、『アキル』の三つの写本から成り、『アキル』はこのうち最後にある。現在クロアチア国立図書館蔵（R 3495）。本稿は（Hercigonja, 2002）を参照。²⁶ 以下 D とする。

ここではまず P, L, D の三写本を比較してそれぞれの特徴と系譜関係を示し、つぎにこれをほかの南スラヴ圏写本（Sav29, Ch, S309, B53, B828）ならびにロシアの校訂テキスト RI と比べ、スラヴ各リセンションの間のテキスト的關係を明らかにする。なお引用例は、それぞれ典拠する文献の表記に従って記載する。

以下に再度、P, L, D と比較するテキストをまとめる。

RI: Творогов 1999; 底本であるロシア歴史・古代学協会写本は 1500 年前後のもの。

Sav29: Кузидова 2010; ツルナゴーラ、サヴィナ修道院所蔵、1380 年頃。

Ch: Барсов 1886; 写本は 1500 年代初め頃。

S309: ブルガリア国立図書館所蔵 NBKM309, 写本は 1500 年代初め頃。

B828: Дурново 1915; セルビア国立図書館所蔵 828, 写本は 16 世紀後半。

²³ Josip Bratulić, Stjepan Damjanović, *Hrvatska pisana kultura: Izbor djela pisanih latinicom, glagoljicom i ćirilicom od VIII. do XXI. stoljeća, I. Svezak: VIII.-XVII. Stoljeće* (Zagreb-Križevci: Veda, 2005), p. 152.

²⁴ Vesna Badurina-Stipčević, “Priča o premudrom Akiru u hrvatskoglagoljskom Petrisovu zborniku (1468),” *Hrvatsko glagoljaštvo u europskom okružju. Zbornik radova* (Zagreb: Staroslavenski institut, 2015 [in print]); Vesna Badurina-Stipčević, *Hrvatska srednjovjekovna proza I* (Zagreb: Matica Hrvatska, 2013), pp. 251-260.

²⁵ Милан Решетар. Наука примудрога Акира. *Либро од мнозиех разлога: Дубровачки ћирилски зборник од г. 1520*. Сремски Карловци. 1926. С. 48-55.

²⁶ Eduard Hercigonja, “Priča o premudrom Akiru (Historia de sapientissimo Achiore),” *Hrvatska književna baština.1* (Zagreb: Exlibris, 2002), pp. 11-54.

B53: Станковић 1980; セルビア国立図書館所蔵 Rs53, 写本は 1570-80 年頃。

4. P, L, D の基本的な言語特徴

クロアチアの三写本はいずれも、スラヴ・アーキタイプに近いとされる RI に比べると大幅に短縮されており、その程度は、新しい写本になるほど進む。三写本の中では年代的に最古の P がもっとも長い、P より半世紀後に作られた S309 に比べても 3 分の 2 ほどである。L は教訓部分に大幅な削除をとまって S309 のほぼ半分、D はさらに短く、わずか 6 枚（約 55 字×22 行/頁）である。

また P, L, D いずれも、写字生の“現地馴化”（domestication）のストラテジー—起点テキストの、土着俗語による書き直し—の顕著な特徴によって共通する。

もっとも古い P は、古教会スラヴ語（OCS）の要素を多少残すが、基本的には土着のチャ方言とカイ方言²⁷の混交言語で書かれている。ヘルツェゴニヤの研究以来、ペトリス文集は、チャ方言とカイ方言ならびに教会スラヴ語クロアチア・リセンションが混合した古クロアチア語で書かれているとされるが、²⁸ この写本も例外ではない。たとえば OCS 形 *ašte*（「もし」）が 2 例に対し現地方言形の *ako* は 34 例、関係代名詞に OCS 形 *eže* は 1 例、それ以外は現地方言形の *ki* が使われている。疑問代名詞にはチャ方言固有の *ča* が 18 例と優勢だが、カイ方言形 *kaj* も 2 例検証される。²⁹ **ě* の反映形は *i* または *ê* (*ĭ/je*)³⁰ : *lipotu* (*lĭepota*<**lĕpъ*「美しさ」); *misto* (*mjesto*<**mĕsto*「場所」), *miseca* (*mjesec*<**mĕsęcъ*「月」); *pĕsak* (*pijesak*<**pĕsъkъ*「砂」)。

L は疑問代名詞にもつばらシト方言形 *що* (*što*), *тко* を使用、また **vs-*→*sv-*: *cvaки*, *cvaкои* (<**vъsъ-*「あらゆる」), **l>o* : *mogao* (*mogao*<*mogal*, *moći*「できる」<**mogt'i*), *osao* (*osao* [<*osal*]<**osъlъ*「ロバ」) など、シト方言固有の音韻変化とそれを反映した表記が明確に現れている。**ě* の反映形は基本的に *ie*: *liepotu*, *miesecu*, *piesku*。ただし *i* になる場合がいくつかある。たとえば *iziao* (*izjest* の完了分詞形「食べてしまった」); 接頭辞 *pre-* に変わる *pri-* の使用 : *primudri* (<*premudri*)。

D は疑問代名詞にシト方言形 *što* を使用 (19 例)、ほかには *ča* を一度のみ用い、*kaj* の

²⁷ どちらも現在のクロアチアで使用される南スラヴ語方言。チャ方言は疑問代名詞に *ča* を、カイ方言は *kaj* を用いることから、このように呼ばれる。

²⁸ Eduard Hercigonja, *Nad iskonom hrvatske knjige. Rasprave o hrvatskoglagoljskom srednjovjekovlju*. (Zagreb: SNL, 1983), pp. 303-311.

²⁹ ここでの用例数は主格のみ。

³⁰ * のついた形はスラヴ祖語形。*ê* はグラゴル文字のヤト（キリル文字で ѣ）を表す。以下の用例のカッコ内は、順に標準クロアチア語形、スラヴ祖語形。スラヴ祖語形の典拠は *Трубацев О.Н. (ред.) Этимологический словарь славянских языков: Праславянский лексический фонд. 1974-; František Korečný, Základní všeslovanská slovní zásoba* (Praha: Akademie, 1981)。

使用はない。とはいえシト方言固有の音韻変化たとえば*jd>dj>d は反映されておらず (pojde, pojti「行く」), 語末の l は, P と同じく l で表記される: hotil (P hotîl, L хотио, 動詞 htjeti「欲する」の能動完了分詞 <*xotěti), osal (P osal, L ocao)。関係代名詞はもっぱら ki (19 例) を使用。*ě の反映形は i:dite (diēte <*dětę「こども」), hlib (hljeb<xlěbъ「パン」) など。このように D は, 疑問代名詞ではシト方言の特徴を示すものの, L のような明らかなシト方言化は見られず, P に近い方言形を主に用いていると特徴づけられる。

5. P, L, D の関係

5-1. クロアチア写本の共通点

1 で述べたような物語の成立背景や構成内容から, スラヴ圏においても, あらゆる『アキル』写本にそれぞれ固有の書き加えや削除, また教訓部分の順序の入れ替えなどが見られ, このことが比較テキスト研究を著しく困難にしている。しかしながら, 複数の写本に共通し, ほかのリセンションには存在しない書き換えもあり, こうしたものに依拠して複数の写本を一つの起点テキストに関係づけることは可能である。以下では順次, そうした共通特徴を挙げ, クロアチアの三写本が共通の起点テキストを持つことを示す。

まず初めに P と D の関係を定めておきたい。P と D は, 文や語句の特徴から“親子関係”—D が P,あるいは P にきわめて近い写本から成立した関係—にあると考えられるが, 次の例はこの見方を確実に裏付けるものだろう。

P) Sinu moi Anadane pomeni Adaletu Sam'sonovu ženu kako ostrigši Samsona i oslepi i prêda inoplemenikom vragom' i on' za žalost' obori grad' na se i pogubi priêteli i nepriêteli svoje.

[息子よ, サムソンの妻アダレタが(彼の)髪を切り盲目にして敵に売り渡したことを覚えおけ, その憤りのために彼は町を破壊し味方も敵も殺したのである]

アキルは再三息子に, 悪女に対する戒めを説くのだが, P ではこうした中に, サムソンとデリダの比喩が現れる。そしてこれと同じものは, スラヴ写本の中で D のみに現れる。

D) Sinu moj spomeni se na Dallillu Samsonovu ženu ka istriže vlasi njemu i proda ga neprijatelem ki ga oslipiše [息子よ, サムソンの妻ダリラが彼の髪を切り敵に売り渡し, その敵が彼を盲目にしたことを覚えおけ]

D は P の教訓を短縮し, 語もいくらか変えているが, この二つの継承関係は明らかである。

この部分で例示されるように、D は P のダイジェスト版の様相を呈するが、ただし単なる短縮ではなく、たとえば car/cesar は kralj (王), hlib は kruh (パン), rab は sluga (召使), hram は hiža (家) へと、先行テキストに用いられている語彙をより身近な語彙へ置き換えており、ここに写字生の現地馴化ストラテジーを確認することができる。

このことから P と D が最小のサブリセンションをなすとみなし、これを P/D と表すと、P/D と L には、下記(i)–(iv)の点で共通性が見られる。

(i) エピソードの欠落。P/D と L は、III 部 (2 節参照) の初め、すなわちアナダンがアキルの後継者に任じられた後から、その暴君ぶりを叱責され、逆恨みによりアキルを陥れるに至るまでのエピソードを欠く。ただしこれは後述するように、ほかの写本にも共通する点である。

(ii) 同じ聖書の引用。アキルが養子アナダンに数々の教えを与え始める II 部の冒頭部分を RI, Sav29 で見ると、次のようにある。

RI) и глаголахъ ему тако: «Человѣче, внимай глаголы моя, господину
мой Анадане! Всякому наказанью ясны буди во всѣхъ днѣхъ жития твоего
[かくして私は彼に言った—よいか、私の言葉を心に覚えよ、私のアナダンよ。人生
の日々においてあらゆる教えに聴くあり]
Sav29) и рекохъ ѹмоу. прими ꙗзѹ мою. Снѹю мою Ана<д>нане вса все (!)
наказанию послушамы мене [かくして私は言った、私の言葉を心に覚えよ。
息子アナダンよ、私のあらゆる教えに従い]

このように文言には異なりが見られ、Sav29 では書記上の乱れもかなりあるが、どちらも息子に対し、自分の言葉をよく心得てこの教えに従うべしと語りかけて教訓を始めている。これに対してクロアチアの三写本には、次のように書かれている。

P) I rêh' sinu moi Anadane prvo načelo prēmudrosti est' strah' g(ospod')n'. Po
tom' budi skor slišati...
L) И рихъ наипарво сину мой анадане парво ти почело приємудрости страхъ
гдна бога потомъ буди скоро слишати...
D) I Rekoh mu. Sinu moj Anadame, Pervi početak mudrosti jest strah gospodinov.
Potom budi barz slišati...

いずれも「かくして私はこう言った」の後に「知恵の初めは神（へ）の畏れである」（下線部分）という、旧約聖書の詩篇 110.10 あるいは箴言 1.7.にある文言を挿入している。「初

め」を表す語には、この語の異なる歴史的かつ方言的変種である *načelo-počelo-početak*³¹ が用いられているが、それでもテキストの同じ箇所と同じ聖書の引用句が偶然現れたとは考え難く、この引用は、これらが共通の起点テキストに由来することを示すといえる。

(iii) 「穴あき船」の比喻。P と L はいずれも、中東版（シリア、アルメニア）、また RI, Sav29, S309 などにはない次の文言を含んでいる（対応するものは D になし）。

P) Zač' bolê se e va ut'li ladi voziti na gluboci vodi nego sa zlom ženom svêt' imêti. Ere ut'la ladê hoće ednu dušu pogubiti a zla žena mnog' žitak' podvratiti.

L) нере ти се не боле возити у угли лади у сдбци³² води неголи имати свиеть са зломъ женомъ
иере угла ладиа иедну душу погубити а зла жена много жизннихъ хоће расточити
[穴のあいた船で水の深みへと進んだほうが悪女とともに生きるよりましである、というのも
穴あき船は一人の魂を奪うだろうが、悪女は多くの人生を破滅させるのだから]

この船と水の比喻がない S309, RI では、ここに対応する箇所は以下のようにある—

S309) Снѣ добрейше кѣст огницею или тресавицею болети, нежели съзлоу
женоу жити.

RI) Сыну, уне есть огнем болѣти, али трясавичею, негли жити со злою женою
[息子よ、悪女と生きるよりは、熱病、瘡のたぐいに苦しんだほうがましである]

(iv) 偽手紙の日付と場所。アナダンは一アキルを謀反人に仕立てるために偽の手紙を書く。その中に記される日付と場所は、古い中東版,³³ ロシア版および南スラヴ版 Ch では 8 月 25 日、“エジプトの野”である。

R1) И готовъ буди мѣсяца августа 25 день на поли Егупетъстѣ
Ch) и готовъ боуди мѣца августѣ въ кѣ. днѣ на поле егѣпътско.

³¹ スラヴ語で「初め」を表す語はいくつかの語形成により作られるが、スラヴ祖語の語根 *čę-, *kon- (P.I.E. *ken-/ *kon-; cf. *Трубачев. Этимологический словарь. Т. 4. С. 109.*) からは、たとえば古教会スラヴ語の名詞 *начало, зачало, поконь*, 動詞 *начати, зачати, почати* などが形成された。セルビア・ボスニア・クロアチア圏では *po-* 形、すなわち動詞 *početi*, 名詞 *početak* (< *po-čęt-ъкъ*) が標準形となり *na-, za-* などの接頭辞がついた *načet, začet* といった形は方言に限られるようになった。スラヴ語形 **nače(d)lo* の直接の反映形 *načelo* は現代語では「原則」の意味で用いられている。

³² Реше́таp 1926 の注に [dubci の誤記か] とある。

³³ たとえばこの箇所のアルメニア版は “come to the plain of the Eagles on the 25th day of the month Hrotitz, and <...>” (Conybeare, 1898, p. 37.). Hrotitz は古アルメニアのカレンダーで 8 月に該当。

[8 月 25 日にエジプトの野にて待機せよ]

しかし P/D, L では、月は 3 月、日は P/D で 6 日、L で 15 日、また指定された場所は“オドルの野”と現れる。

P) veli ti Akirъ gotov' budi .e. dan' miseca marča na poli na Odorskom'

L) буди готовъ петнаисте дни мисеца марча на полу на одорскомъ

D) da budeš na šesti dan miseca marčja na pol[j]ju na Vdovskom

日付の異なり、すなわち P/D が 6 日、L が 15 日である点は、これらの起点テキストに.ѣ. (=15) とあったと想定すれば、矛盾なく解釈できる。おそらく P は、キリル文字で書かれた起点テキストの.ѣ.を、意図的に、あるいは間違えて.e.としたのであり、D はこの.e.を見て、グラゴル文字体系の数の表し方に照合しこれを šest と書いたのに違いない。また L は、同じ起点テキストの.ѣ.をそのまま文字で петнаисте (15) としたのだろう。

以上の共通点から、P/D と L が同じ起点テキストに関係づけられることは確実と考えられる。さらに加えるなら、次の部分も P と L に共通する箇所である。アキルが息子に与える数々の教訓の中に、「金持ちの子供がへびを食べたなら、人々は治療のためと言ったが、貧乏人の子供がへびを食べたなら、飢えのせいだと言った」（同じ行為でも、誰がなすかによって世間の見る目は異なるから心せよという教訓）という、古いリセンションに共通して現れる文言がある。P, L はどちらもこの後ろに「息子よ、この世とはこんなものだ」（下線部分）という言葉を書き加えている。

P) Sinu moi Anadane bogata muža sin' biše zmiju izel'. i rêkoše emu ljudi likarieče radi vzel'. I uboga muža sin' biše zmiju izel' i rekoše ljudi gladajuće radi. Sinu moi Anadane tako ti e u sem' svētu.

L) Сину мои Анадане богата оца синь биеше змию изио рекли би люди лиека ие циећ изио, Сину мои Анадане убога мужа синь биеше змию изио и рекоше люди глада ю ие циећ и изио. Сину мои Анадане такои е у овомъ свиету.

5-2. P と L の相違

5-1.で述べたことから、P/D と L は共通の起点テキストをもち、同じリセンションに属すると結論づけられるが、P と L の間にはいくつかの相違があることも指摘しておく必要がある。

その第一は以下に示す部分にある。

P	L	D
Sinu moi Anadane da budêta oči tvoi doli zrêci a glas tvoi vele potulen. Zač' ako bi glasom' č(lovê)kь mogal' počtên'ê dobiti <u>osal' bi rikaniem .b. hramini</u> <u>podvigal na sebi.</u>	Сину мои Анадане да будете очи твоие долие гледати а гласъ твои vele потулень Иере ако би велициемъ гласомъ услишанъ био <u>осао би двигао риканомъ на</u> <u>себи три граде и четири жупе</u> <u>даржао</u>	Sinu moj da budita oči tvoje doli gledeči glas tvoj velje potišan Jer ako bi kričem poštenje hotil dobiti <u>osal bi rik[a]njem dvi hiži</u> <u>zdgivnul na sebi.</u>
[息子アナダンよ、目は伏せ声は 潜めよ、なぜなら声で敬われる ものならロバなどは一度吠え て家を2軒建てられるだろうか ら]	[息子アナダンよ、目は伏せ声は 潜めよ、なぜなら叫び声で（人 に）聞いてもらえるなら、ロバ などは一度吠えて町を3つ作り ジュパを4つ治められるだろう から]	[息子アナダンよ、目は伏せ声は 潜めよ、なぜなら叫び声で敬わ ようとするなら、ロバなどは一 声で家を2軒建てられるだろう から]

Pにある「目は伏せ、声は潜めよ、なんとになれば大声でよければロバなどは一声で1日に家を2軒建てられるだろう」という教訓は、多くのリセンションに現れるものだが、³⁴ この中の「家を2軒」の部分、Lでは「町を3つ作り、ジュパを4つ治められる」に書き換えられている。この書き換えについては後の6でさらに述べるが、ここではとくに *župa* 「ジュパ」という語の出現に注目しておきたい。*župa* は南スラヴ、とくにバルカン西部スラヴ圏すなわちセルビア・ボスニア・クロアチア語域で中世以来「村、郷」のような居住単位として、またカトリック教会の小教区 (*parochia/parish*) の意味で、用いられた語である。³⁵ これがここにあるような形で書き加えられていることは、この語が普通に使用される環境で、そしてジュパを4つ治めるような立場の人を読者に想定して、テキストが形成されたことを示唆すると言えるだろう。

PとLとの相違は、アナダンの偽手紙の中一「ペルシャの王アロン」に宛てたもの—にも見出される。この部分の RI, S309 は次のようにある。

³⁴ RI) Сыну, очи твои да будета долу зряща, глас твой обниженъ; аще бо и великымъ гласомъ хранимъ ся создати, осель бы риканиемъ своимъ 2 храмънѣ въздвигль единымъ днемъ; Sav29) аще се бы храмъ гласомъ съзидиль то осель бы риканымъ .в. храма съзидаль въ юнь день.

³⁵ Petar Skok, *Etimologijski rječnik hrvatskoga ili srpskoga jezika*. III (Zagreb: HAZU, 1973), p. 687.

RI) написа грамотѣ к ратному цареву перскому, ему же имя Алонь, и тако
написа [その名をアロンという, 敵のペルシャ王に手紙を書き]
S309) и написа двѣ книзѣ, а. црю перскому ему же име Алонь и тако написавъ
рекъ [そして二通の手紙を書き, 一通を, アロンという名のペルシャ王に宛てて言った]

これに対応する部分は、クロアチア写本では次のようになる。

P) I napisa Anadan' dva lista i da edan c(êsa)ru i r(e)če c(êsa)re
[それからアナダンは二通の手紙を書き, 一通を王に宛てて言った]
L) и потомъ Анаданъ написавъ двие книзи иедну посла Алону цару [それからアナダンは二通の手紙を書き, 一通をアロン王に送り]
D) I napisa Anadam dva lista i da jednoga kralju Sinagripu [それからアナダンは二通手紙を書き, 一通をシナグリブ王に送り]

ただちにわかるように、P には固有名詞がなく「王に」とあるのみだが、L には「アロン」の名が書かれている。もし L が P しか見ていなければ、ここに、ほかのリセンションと同じアロン王の名があることは説明できない。いっぽう D は、P のこの部分に名前がなかったために、前後から判断して「シナグリブ」の名を加えたのだろう。

こうした相違から、L は P を直接参照したのではなく、P と L のテキスト的近さは共通の起点テキストによるものであることが確認されるのである。

6. 南スラヴ圏写本の比較

前節では、クロアチア写本が共通の起点テキストをもつこと、つまり一つのリセンションを形成すること（以下クロアチア・リセンション）、しかし L が P の“直系”ではないことを示した。次にこれらのことがらをもとに、クロアチア・リセンションをほかのスラヴ圏写本と比較する。

まず、アナダンが後継者になってからアキルを陥れようと画策し始めるまでのいきさつが欠落するという点は、Ch, B53 にも共通して見られる。ここから、南スラヴ圏では、Sav29 に代表される古いリセンションから、この部分を欠く写本が作られ、これがいくつかのサブリセンションに分岐したものと推測される。

次に「知恵の初めは」の引用は、B53 にも記されている。

B53) сыну мой анадане начело премудрости страха господьне. и разумь
благо>гл<агольнь> творещимъ е. С<ы>ну мой ан<а>дане аще хоцещи бити
премударь буди мльчеливь и ...³⁶ [息子よ、賢知の初めは神への恐れである。この教えを行うも
のには知の恩恵がある、息子アナダンよ、賢くありたければ口を閉ざし[…]]

B53 のこの部分は、あきらかに詩篇 110.10 と一致する。対応箇所をシナイ詩篇およびボゴ
ジーン詩篇で示すと以下の通り。

シナイ詩篇) поконь прѣмѣдрости страхъ гнѣ.) Разоумъ же благъ всѣмъ творѣштимъ ѣх³⁷
ボゴジーン詩篇) Начало прѣмѣдрости страхъ гнѣ. Разоумъ же блѣтъ всѣмъ творѣщимъ ѣх³⁸

そこで、この B53 の引用から、以下のことを導くことができる。すなわちクロアチア・リ
センションに見られた「知恵の初めは神への畏れ」という文言も、もとはおそらく B53
のような形だったのであり、クロアチア・リセンションに至る過程で、この引用の後半部
分が削除されたのだろう。また、転写のどこかの時点で начело に“第一の”を表す形容
詞がつき、これが P の pervo načelo に反映され、そしてこの“最初の初め”というフレー
ズが写字生たちの現地馴化ストラテジーによって parvo počelo, prvi početak といった現地
形に書き換えられたのであろう。

また、偽手紙の日付に関して見ると、S309 は「エジプトの野に 8 月 15 日」とあり、場
所と月は RI や Sav29 など、スラヴ・アーキタイプに近いリセンションと共通するが、日
付は 15 日で L と同じ、また B53 は L と一致して 3 月 15 日、“オドルの野”である。

S309) прїиди на поле егѣптъское мѣца августу .сі. днѣ.
B53) да будешь на полю одорскимъ .сі. днѣ. мѣсеца марта

B828 では混乱が見られ、シナグリプ王からアキルに宛てたと見せかけた手紙では рече
Анаданъ мѣца августу .сі. днѣ. (日付は文字が不鮮明で判読不可)、いっぽうアキルからエジプト
王に宛てたと見せかけた手紙には прїиди на поле егѣптъское мѣца марее .сі. днѣ. [3 月 15 日
にエジプトの野に來たれ]とある。このように、月に関してはクロアチア・リセンション
と B53 で 8 月から 3 月への書き換えがあり、B828 には部分的にこの特徴が反映されてい

³⁶ Станковић. Слово Акира премудрог. С. 222.

³⁷ Северьянов С. Синайская псалтырь. Глаголическій памятникъ XI в. Пг., 1922. С. 147.

³⁸ Vatroslav Jagić, *Словѣньска псалтырь. Psalterium Bononiense* (Vienna: Gerold, 1907), p. 552. ボゴジ
ーン詩篇はマケドニア由来 12 世紀頃のもつとされる。ロシア国立図書館 (ペテルブルグ) 所蔵。

る。また S309, B53, B828 で 25 日が 15 日に入れ替わっており、これがクロアチア・リセンションの 6/15 日になることは先に見たとおりである。また場所はクロアチア・リセンションと B53 で“オドルの野”，それ以外では“エジプトの野”である。³⁹

さらに、「穴あき船」の比喻も、クロアチア・リセンション以外には、B53 に現れる。

B53) С<ы>ну мои ан<а>дане боле ти се је возити у оутле ладие на мутне водии нежели
зле жене съветъ казати у оутле ере ће оутла ладиа одну погубити а зла жена мнугу ће
жизань растоучитии.⁴⁰

次に「町を 3 つ、ジュパを 4 つ」という、クロアチア・リセンションでは L にのみ見られた表現を探すと、これは B53 と S309 に検証される。

B53) осьль би риканиєм на себе дићи д. граде и д. жупе дрьжал би
S309) аще бы повеле гласію дѣлю велико <...>о осьль бы риканіємъ двигль двѣ храминѣ и
трї градовѣ и четири жоупѣ

これら以外にこの付け加えは見られない。よってこの点では L と B53, S309 が一つのグループを形成することになる。

7. 南スラヴ圏写本の関係

前節までに述べたことをまとめると、クロアチア・リセンションと B53 の間に (i) アナダンの後継者任命から奸計をめぐらすに至るエピソードの欠如, (ii) 「知恵の初めは神への畏れ」の引用, (iii) 「穴あき船」の比喻, (iv) 偽手紙の日付と場所の書き換え, という共通性があり, (v) 「3 つの町と 4 つのジュパ」の挿入によって L は P/D とは異なり, B53 および S309 と共通することになる。下の表は、これらの特徴が南スラヴ圏の主要写本でどのように分布するかをまとめたものである。なお (iv) の A は 8 月, M は 3 月を表す。

³⁹ Ch は готовъ боуди мца, авста. кѣ. днѣ. на поле егѣптьско で RI と同じ。

⁴⁰ Станковић. Слово Акира премудрог. С. 223.

《南スラヴ圏写本の関係》

	Slavia Latina			Slavia Orthodoxa					
	セルビア・ボスニア・クロアチア圏						ブルガリア		ロシア
	クロアチア・リセンション			セルビア圏写本					RI
	P	D	L	B53	S309	B828	Sav	Cher	
(i)	欠如			有			欠		有
(ii)	○	○	○	○	×	×	×	×	×
(iii)	○	○	○	○	×	×	×	×	×
(iv)	M. 6	M. 6	M. 15	M.15	A.15	A/M.15	A.25	A.25	A.25
	“オドルの”			“エジプトの”					
(v)	×	×	○	○	○	×	×	×	×

8. 結びー『アキル』はどう伝わったのか

本稿で明らかにしたことから、南スラヴ圏『アキル』の写本関係について次の主張ができる。まず、スラヴ・アーキタイプ（これも南スラヴ圏での成立ではないかと本稿筆者は考える）から、南スラヴ・第1リセンション（SS）が作られ、そこから上記 (i) の欠落をもつリセンション（SSa）が派生した。この SSa から一つには Ch が、また他方にはクロアチア・リセンションや B53 などの起点テキストが含まれる南スラヴ語西部（セルビア・ボスニア・クロアチア）リセンション（SSW）が形成された。SSW は文献が現存する場所（セルビア）、作られた時代（おそらくオスマン支配以前）、B53 に見られる詩篇の忠実な引用などから推測して、ネマーニャ朝時代（13-14 世紀）のセルビアで作られた可能性が考えられる。この SSW に属する写本（のいくつか）が、いかなる経緯かは不明だが、クロアチアのグラゴル派の手に渡って P が成立し、またおそらくはすでにオスマン支配下にあったセルビアからボスニアを経由してドゥブロヴニクあるいはその文化圏に引き継がれ L が作られたのだろう。また SS が伝播するプロセスのどこかで「3 つの町と 4 つのジュパ」の書き加えをもった写本が現れ、これは一方で S309 に、他方では、B53 やクロアチア・リセンションの起点テキストに反映された。この書き加えが行われたのはもちろん župa という言葉が日常的であった地域であり、この župa を治める立場のような人を想定してこの書き加えが行われたものと考えられる。

バルカン半島はビザンツ教会圏スラヴ—Slavia Orthodoxa—と西方教会圏スラヴ—Slavia Latina—に二分されるが、そうした教会勢力圏の境界を超えて『アキル』は東から西へと伝わった。クロアチア・リセンションと B53 が同じ一つの起点テキストをもつことは、中

世バルカン世界における文化情報ネットワークが、東西教会の教会を超えて形成され、写字生、あるいはさまざまなテキストの伝達と受容に関わった人々が、そこに最新の文化的報を入手するためのコネクションを持っていたことを物語っているのではないだろうか。

『賢者アキルの物語』はロシアでは様々に書き換えられて 19 世紀まで伝えられていく。こうした中で 17 世紀以後の写本にいくどか現れる *сокол трех мытехь* (三たび羽の生え変わった鷹=完全に成長した鷹) を、過去の研究者の何人かは『イーゴリ遠征物語』の中のスヴァトスラフ公“黄金の言葉”の中にある *Коли соколь въ мытехь бываетъ, высоко птиць възбивает* の表現と関連づけ、『イーゴリ』の *соколь въ мытехь* も *сокол трех мытехь* の意味であろうと解釈している。⁴¹ この解釈が正当なものかどうかは別論として,⁴² このエピソードは、『アキル』がさまざまな中世スラヴ文学の作品との間テキスト性という点からも、きわめて重要な素材であることを象徴していると言えるだろう。

«Повесть об Акире премудром»: текстологический анализ южнославянских списков

МИТАНИ Кэйко

Статья посвящена южнославянским спискам средневекового памятника «Повесть об Акире премудром».

«Повесть об Акире премудром», возникшая в древней Месопотамии, была переведена на славянский язык в XII-XIII вв. и распространилась в России и южнославянских землях. Русские редакции повести исследовали, среди прочих, А. Н. Пыпин в XIX в., А. Д. Григорьев и Н. Н. Дурново в XX в., занимаясь главным образом проблемами славянского архетипа, а также местом и временем осуществления первого славянского перевода. На эти проблемы исследователям до настоящего времени не удалось

⁴¹ Творогов. «Сокол трех мытей». 1969.

⁴² 木村彰一訳は、ロシアのスレズネフスキー以来の伝統を踏襲してか「古い鷹も／羽替えののちは／群鳥を…」とある。

найти окончательные ответы. Повесть на балканской почве переписывалась не только православными, но также католическими переписчиками; у балканских славян было создано в целом около десятка списков. Южнославянские рукописи, несмотря на раннее издание глаголического и кириллического списков В. Ягичем в 1868 г., и поныне не вполне изучены.

В настоящей статье прослеживаются языковые и текстологические особенности трех списков, созданных в нынешней Хорватии, и показывается, что они, вопреки различиям по языковым признакам и по количеству пропусков текста, восходят к общему источнику и составляют одну собственную редакцию, которая в работе именуется «хорватская». На основе обсуждения проводится сопоставительный анализ прочих южнославянских списков, сохранных в Болгарии и Сербии. Анализ обнаруживает не отмеченное до сих пор текстологическое взаимоотношение южнославянских списков, в котором одна сербская рукопись связывается с хорватской редакцией.

Наблюдения позволяют предположить, что несмотря на наличие религиозного разграничения, которое делило Балканский полуостров на два религиозно-культурных мира *Slavia Orthodoxa* и *Slavia Latina*, на балканском пространстве в Средневековье формировалась своеобразная информационная сеть за пределами религиозных границ, в которой переписчики и те, кто имел отношение к переводу и перемещению текстов в обоих мирах, приобретали различные источники творчества во взаимосвязанном контакте.